

「少年時代」 ロバート・R・マッカモン 訳 二宮馨

(BOY'S LIFE by Robert R. McCammon)

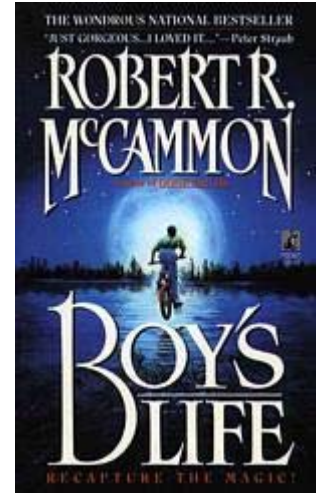
紹介者 榎本博康

[紹介]

主人公、コーリー・マッケンソンは十二歳。アメリカ南部アラバマ洲の田舎町、人口千五百人のゼファーに住む。時は1964年(東京オリンピックの年だ)。払暁に牛乳配達の手伝いで一緒に行く途中、死体を乗せた車が湖に沈められる所を目撃。陰湿な殺人事件だ。平和な街に暗い影が。

彼の親友たち、ディヴィー、ベン、ジョニー、そしてガキ大将の、というよりは粗暴なゴーサとゴードの兄弟、いじめられっ子のネモなどの子供達が子供たちの世界で活躍する。

さらに地域社会では、近くに黒人居住地域があり、魔法使いと畏(おそ)れられているレディという老女が取り仕切っている。教会、学校、警察その他地域の人々が多彩に登場し、空想力を失っていない子供だけが見ることのできる世界と、現実の大人の世界とを織りなして、輝かしくも懐かしい世界が繰り広げられる。



BOY'S LIFEの表紙

[感想]

本書は1990年に米国で発表され、1960年代のトム・ソーヤー物語として愛読されているという。その待望の日本語版である。

では、さっそく走ることを調べてみよう。この話は子供達が主人公であり、またアメリカの田舎町でだだっ広いから、自転車が足だ。だがコーリーは自転車が壊れてしまい、父の収入が少ないので買ってもらえない。そんな時に夏休みになった。最後の授業が終わると、親友との四人組はそれぞれに犬を連れて、かねてから約束した通りに、町を見下ろす丘の上に集合した。他の三人は自転車で来たが。

集合すると、彼らは丘の上の空き地を自分達の足で走り始めた。犬達も一緒になって。風ともみ合いながら、速く走り続けた。するとまずベンの背中に翼が生えた。彼の犬のタンパーにも。全員が翼を持ち、ゼファーの町の上空を飛び回った。

小説を読むコツはのめり込むことだ。生きいきとした筆遣いに乗って、想像力を働かせて読む。風と共に、無心に、喜びに満ちて、力の限りに走ることができれば、飛べてあたりまえなのだ。しかも四人の子供達と犬である。一人で走ってもこうはいかない。共走することで、心を高揚できる。さらに犬は安心して秘密を共有できる物言わぬ友人だ。

どうだろうか。私達もこのように走って見たら、飛んでいる気になれるかもしれないし、ひょっとしたら本当に飛べるかもしれない。この輝ける瞬間、夏の始まりの儀式。でも輝きが強いほど、読者にこれは彼らにとって最後の儀式であることを思わせる。

所で作者自身を投影したらしい主人公のコーリーは幸せだ。夏休みの最後の授業の後で、ネヴィル先生に呼ばれ、文芸コンテストに出品するように言われる。彼の文才を見ぬいてのサジェスチョンだ。彼はそれに応えて三等に入選する。最年少の入賞だ。

一方ネルは可哀想だ。彼は行商人の子で、舌足らずのしゃべりしかできない。転校の度にい

じめられる。でも彼はすごいボールを投げる野球の天才なのだ。コーリー達はそれを知って彼を尊敬する。しかし、大人達は、彼の両親ですらそれを知らない。母親は頭から否定してしまう。そして引っ越して行く。大人の責任は重い。

さらにコーリーがデーモンと呼ぶ、不気味な女の子が下級生にいる。不細工で、いつもねばついた緑色の鼻くそをほじっている子だ。彼女が何と飛び級で、コーリーのクラスに編入される。彼女には化学の才能があり、それを見出した先生の推薦で上がってきたのだ。日本では考えられない。無作法、不細工と才能は別なのだ。困ったことに彼女はコーリーが好だ。彼はどうやってその苦境を切りぬけるか。

さて奇人ヴァーノンに言及したい。彼は町一番の資産家のムーアウッド・サクスターの息子で四十歳になるが、素っ裸(フリチン)で町を歩きまわる。もちろん彼も昔は普通の人だった。だが実業家の父が彼を後継者として育てようとしたのに対し、彼は小説家を志望した。彼はこの町に題材を採った作品を書き、ニューヨークの出版社に持ちこんだ。出版社は売れるには少しもの足りない、彼をホテルに缶詰にして殺人事件を折りこませた。本は発売されたが、彼が書きたかったものとは違うものになってしまい、深く傷ついて二度とペンを執らなかった。さらに父親は彼が稼いだものは何ひとつない、着ている服もだと責めた。だから彼はそれを脱いだ。

このエピソードは非常に象徴的だ。私達はいつのまにか、小説の世界では殺人事件に慣れっこになっている。殺人が無ければ話が成り立たない。後で図書館に行って、殺人のない小説がどれだけあるか調べてみよう。所で、本書はヴァーノンの小説でもある。殺人事件+田舎の生活というプロットがそっくりだ。作者マキャモンは、本書に殺人事件を入れたのは自分の気持ちではないと言いたかったのだろうか。本書の結末で、私がよく言う「説明不用の便利な悪」を犯人にしたてている筋立てからも、そうなのかもしれない。でも、殺人事件は作品全体にほど良い緊張感を与えており、作者は自分の好きで殺人を書いている気もする。きっと着ている服は自分で稼いだ金で買ったものだろうから。

(初稿2000. 2. 12)

#### [リバイバル感想]

少年時代かあ、すっかり忘れてしまったなあ。そうそう、遠い昔、青空少年団という、実に素直な名前のグループを結成して、自転車であちこちと遊びまわっていたことを思い出した。でも街中だったから風景は限られている。互いの家に行っていたのだろうか。団結のしるしに揃いの青いキャップを買った。ただ私ともう一人は子供用が合わず、大人用だった。

その子供たちが自転車で連なって走っていると、もう一人の大人キャップ君が少しはみだし、並走のトラックを驚かした。すかさず助手席から罵声が飛んだが、大人キャップ君は右手で帽子をとり、丁寧にお辞儀をして、どうもすみませんでした、とやった。助手席の人は思わず笑った。大人キャップ君は本当に大人だと感心した。

ある時、謄写版刷りの新聞を作ろうとなって、何と印刷器を自作した。木工系業者の息子が居て、器用に作った。しかし謄写版ローラーは自作できないので、誰かの親の資金提供で購入した。取材して、ガリ版を切って、印刷した。最初は鉄筆の力加減が分からず、文字がよく出ないという失敗もあった。家探しをすれば、一枚くらいは残っているかもしれない。私の記憶では第1号の1面は浅沼稲次郎社会党委員長暗殺だった。60年安保の年、それが何を意味するかは分からない少年たちにも、何らかの影響を与えたのだろうか。

(2021. 2. 14)